

## 福祉時代のいのちの意味とケア

——二つの新書を読む——

玉井 仁

### 目次

- はじめに  
一 「ほんとうの生きがい」を求めて  
二 「死ぬ場所」を求めて  
三 おわりに

### はじめに——発想の転換

現在の日本の社会状況はどんなものであろうか。小・中学生のみならず、大学生の不登校が新聞をにぎわし、「ひきこもり」という社会問題が表に出始め、それに関わる陰惨な事件も次々と起こっている。学校に目を向けると、生徒が教師のコントロールに従わなくなっている「学級崩壊」があり、家庭では「児童虐待」があれば、子どもや若者の「暴力衝動」の高まりも社会問題となっている。それらに加えて不況によるリストラや、同時に中高年の自殺者も急増している。

明るいニュースよりも、「この世に希望はないのか」と思わせるかのような暗く閉塞感を伴うようなニュースが

圧倒的に目につく。

そのような中、社会は高齢者社会に突入し、若者達は心理職、福祉職に以前よりもはるかに興味を持ち始め、学校や社会もそれらの分野を再認識し始めている。自分の事ばかりに固執するのではなく、人との「つながり・関わり」を大切にしていこう、人の「役に立とう」という価値観にスポットライトが当てられ始めている。

この動きは一体何によるものなのであろうか。いくつか理由はあるだろうが、現在の男性社会の中で、女性が力を発揮しやすい分野として、女性が専門職を求めた一つの結果でもあるであろう。それと共に、より重要だと評者は考えるが、大変な時代状況であるがゆえに、今までの自己中心的な価値観では状況に対応しきれなくなってきたこと、気づき、それを変えていかなければならないという意識が、社会全体として湧き上がっているのではないだろうか。人とのつながりを大切にするといった、昔からあり、ここしばらく忘れられがちであった価値観が社会に浸透していくことにより、そこに希望を見出そうとし、またお互いを大切にしようということによって、癒そうとしているのであろうか。

現在は、政治、経済その他様々な分野で今までの考え方、方法の転換を迫られているように見受けられる。それと対応して、学問の分野でも新しい概念、発想が次々と発表されている。いかに生き、いかに死ぬか。本来ならば宗教が教えてくれた事を、すっかりどこかに置き忘れてしまっていた事を、もう一度考え直そうという動きがうねりのように高まっている。

ここに心理学、高齢者ケアを通して現在の社会問題に対する一つの提言、試みを扱った本が二冊世に問われた。一つは『生きていく事の意味』（諸富祥彦著・PHP新書）であり、この本は個人各々が「どのように生きるという事を捉え、考えていくのか」というその方法論を述べている。もう一つは『ケアを問いなおす』（広井良典著・

ちくま新書）であり、人々の共生という視点から生きるということを捉えている。これらの本の紹介を通して、今我々に何が必要かを考えていきたい。

### 一 「ほんとうの生きがい」を求めて

——諸富祥彦著『生きていく事の意味』

——トランスパーソナル心理学・9つのヒント——を読む——

「トランスパーソナル心理学」とは、聞きなれない言葉かもしれない。概略を述べると、夢分析などで有名なS・フロイトの精神分析から始まり、行動主義、そして人間性・実存心理学というように時代と共に心理学の主流も移り変わってきた。そして特に第三勢力と言われる、人間性・実存心理学においては、それまでの心理学においてなござりにされていた人間の可能性、想像性、成長、価値、そして自己実現といった面が強調された。その後、様々な心理療法や理論が続出する中で、それらを統合していこうという要請や、アメリカ西海岸の神秘性に対する志向性などが合わさって、心理学の第四勢力として「トランスパーソナル心理学」が生まれた。この新しい心理学は、それまで言われていた「自己実現」を重視するのではなく、「私たち自身の意図を超えて姿をあらわしてくる様々な呼びかけの声を大切にし招き入れようとするもの」（プロローグより）、すなわち様々な事象の過程（プロセス）に注目し、その捉え方を考え直してみようというものであり、その内容の深さから古代の英知の再発見・復興であるとさえ言われるものである。

この様に振り返ったとき、二〇〇〇年に入った今、「トランスパーソナル心理学」は決して新しい心理学ではない。しかし、その中に含まれる様々な考えは現在の様々な問題に直面するに当たって、はつきりとした一つの方

向を示してくれている。著者諸富祥彦助教は、この本を通して、「こんな時代にあって、それでも意味と希望を見失わず、前向きに生きていく事は可能だろうか？」(プロlogue)という疑問に答えを出す事が出来ると述べている。

(一) 生きる意味を見出す

日常生活において、ふと「私はなんのために生まれてきたのだろうか?」とか、「私が本当にしたいことは何だろうか?」といった疑問が湧き上がってくる事はないだろうか。生きるための目的がはっきりしていなければならぬ。生きる目的を探しつづければならない。そして、それがはっきりわかるまでは人生に意味などない。そんな思いに駆られた事はないだろうか。著者の諸富氏は自分自身悩んだ経験から、我々読者にフランクによる次の言葉を贈ってくれる。

「人間が人生の意味は何かと問う前に、人生のほう人間に問いを発してきている。だから人間は、ほんとうは、生きる意味を問い求める必要なんかないのである。

人間は、人生から問われている存在である。人間は、生きる意味を求めて問いを発するのでなく、人生からの問いに答えなくてはならない。そしてその答えは、人生からの具体的な問いかけに対する答えでなくてはならない。」(三五ページ)

すなわち、「自分が何とかしよう」「自分で何とかしよう」という考え方が、既に、自分の悩みに執着してしまっているのである。その固執こそが我々を悩ませてしまうのである。よく聞く言葉で言うならば、「悩みどころを間違っているわけではない」のである。著者の諸富氏によると、そのこだわりを「手放す」ことが出来たならば、自分が

自分を越えた何か大きなものの力に支えられて生きていくことを実感できるのである。著者自身、大変に深く悩み、悩み尽くしたからこそ、その実感を得たのであろう。悩みがなくなったのではなく、悩みを苦しまなくなったのではないだろうか。

著者は、これまでの心理学の次のような問いの立て方を再考するように勧める。

「私が、本当にしたい事は何だろうか。」

「私の人生の目標は何だろうか。どんな希望や願望を実現したいのだろうか。」(四一ページ)といった自問をする事は、終わりのない繰り返しの悩みの中に自分を縛り付けておくだけとなりがちであるので、出来る事なら違った形で自問したほうが良いという。すなわち、『夜と霧』の著者であり心理学者のフランク流に、

「私は、この人生で何を求める事を求められているのだろうか。」

「私のことを本当に必要としている人は誰だろうか。その人は、どこにいるのだろうか。」

「その誰かや何かのために、私に出来る事は、何があるだろうか。」(四二ページ)

と、まず自分が具体的に出来る事を自問する事を勧めている。著者の諸富氏は、そのような問いかけの変化を通して、フランクが言ったように「欲望や願望中心の生き方」から、「意味と使命中心の生き方」への転換、「したいことをする生き方」から、「成すべきことをする生き方」への転換(四二ページ)が出来るようになったとき、どのような悩みやトラブルが起こったときにも、その悩みに振り回される事なく、そのような事が起こるには何か意味があるはずだ、という考え方に変わっていくのである。

悩みやトラブルは、どんなに避けようと思っても生きている限りつきまとう。悩みやトラブルを喜んで受け入

れるのは難しいかもしれないが、それらを否定的に捉えるのではなく、「それらから何を学ぶ事が出来るのか」という姿勢で臨むことにより、自分自身が成長していくのではないかと思われる。もちろん評者も、すぐにその様な姿勢を持てるようになるとは思わない。しかし、その姿勢を持つとういう気持ち、既にそこに近づいていることなのではなからうか。そして、ふと気がつくとうい自分を見出すことになるのであろう。

今、ここで生きている私たち自身は何者にも代えられないものなのである。どんなに大きなトラブルだって、私たち自身にとって代わることは出来ないし、どんなに魅力ある人や恐ろしい人がいたとしても、私たち自身がその人達になりきることも、脅かされる必要もない。この世でたった一人の自分、全世界、宇宙広しといえども私はたった一人なのである。あえてじっくりとこの単純な事実をよく考えてみると、自分のちっぽけさを感じると同時に、大きな何かに包まれているかのようななんともいえない感覚さえ生じないだろうか。トランスパーソナル心理学では、人間は宇宙の「自己進化の力」の結晶なのだという。そして宇宙を進化するものであるという視点のもと、「まさに『人間は、生きているだけで、偉い』。これが『宇宙の立場』に立ち、『宇宙そのものの気持ち』になって人間を見たときの一つの結論」(六三ページ)だというのである。人は大いなる者に使命を与えられ、それに気がついて生きることを期待されながら、今に生きるものなのかもしれない。

## (二) 自分の弱さと向き合う

人は普段はもちろん、困った状況に陥ったとき、悩んでいるとき、切羽詰まったときには、一般にいけないと考えられる事をしてしまったり、考える時があるであらう。そのようなとき、そのような問題や感情を否定し、「もっと前向きに、肯定的に物事を考え取り組もう」などと考えがちである。現在、「自分には大変に価値がある

んだ」とか、「自分は大切な存在なんだ」というような自己肯定法を行う、様々なワークショップなどの場がある。しかし、そのような「とても単純で素朴な『ポジティブ・シンキング(肯定的思考)』によってつくられた『私』は、とても一面的なもの」(九七ページ)であり、あまりにも薄っぺらで本質的な変化を促し得るものではないのである。たとえ一時は自分に対して肯定的な感情を持つことを得たとしても、またすぐに違う問題や感情に振り回されたいとも限らない。そのとき、また同じような自己肯定を繰り返すのであろうか。

様々な状況において自分を肯定するのでも、否定するのでもなく、素直にその問題や感情を「そのまま」受け止めてみる。良い悪いもなく、どちらも自分自身。良いものだけが自分なんてことはないはずである。どうしても問題が大きすぎるならば、無理をせずに弱音を吐いてみる。そんな中で「私たちの中の『困った感情』は『人生の大切な知恵』に変化していき、これまで気づかなかった大切な事を教えてくれる事が多い」(一〇四ページ)のである。

日本でも有名な、来談者中心療法のC・ロジャースの共同研究者でもあったジェンドリンによると、「人間の感情は、それを人が認めたり感じたりしないときには変化せずそのままの状態にとどまるけれど、逆にその感情を自分の感情として認めたりじっくり感じたりした時は、その感情はひとりりてに変化し始める、という法則」(一〇七ページ)があるという。絶えず上を見る事は大切な事であらう。しかし、それ以上に、その意識に追いかけてしまい、今現在の自分自身を否定してしまおうとするならば、一体その人は上に向かうための第一歩をどこに置けば良いのであろうか。

ダメでもそれを否定しない。そのような生き方をするとき、それが自然に自分自身を認め、受け入れていき、気がついたら上を向いているような姿勢を自然と作っているのではなからうか。

(三) プロセス思考で声を聞く

日本では、様々な心理療法やカウンセリングが行われている。その多くは欧米から入ってきたものであるが、今、また新しい一つの手法が著者によって紹介されている。それは、ユング派の分析家であるアーノルド・ミンデルによる、プロセス思考心理学 (Process-Oriented Psychology, 以下POP) である。これは、自然のプロセスを大切に作るロジャースやジェンドリンと似ており、あくまでも「全てはうつろい自然の流れから生まれ、またそこに帰っていく」(一三五ページ) という日本人特有の自然観・生命観に似て、「人生の流れ(プロセス)に従う」事を基本原理とするものである。

著者によるとPOPを簡単に言うならば、「ただ自分の内外で起きているプロセスに徹する。気付きを伴い、今、この瞬間瞬間を完全に生きる。ミンデルが目指すのは、ただその徹底」(二三四ページ) なのである。

POPでは、悩みや問題にぶつかったとき、それらを自分を成長させてくれる機会を与えてくれるものとして大切にしていこう、さらにはその悩みや問題そのものになりきってみるにより、それらが訴えかけている事に「気づく(アウェアネス)」ことの大切さを説く。そして、POPとはまさに、「あなたも大河のような、この人生の流れ(POP)が、今、自分に何を運んできてくれるか、それに気づき目覚めていくための総合的なアート(技芸)」(二七ページ) だというのである。

著者は、様々な事例を用いて、その過程を分かりやすく説明してくれている。評者も含めて、私たちが生活しているとき、私たちに訴えかけているのに私たち自身が受け取れていない様々なメッセージがあるに違いない。

(四) 死を見つめる

誰もが死ぬということは何のどのような事なのか、良く分からないものとして捉えているであろう。前世の記憶をはつきりと持って生まれてくる人や、すばらしい臨死体験を持つという人の報告もされてはいるが、殆どの人にとって、死は恐るべきものであり、出来る事ならば目をつぶっていたいものであろう。しかし、この世に生を受けた限り、死ぬということはどんな人間に対しても与えられた、選択の余地のないものである。

どのように死を迎えるか。それは、まさにどのようにして生きていくかという問題と表裏一体のものです。キューブラ・ロスは、そのたぐさんの臨死体験談の収集の中で、「死は怖くない。死は、人生でもっともすばらしい経験にもなりうる。そうなるかどうかは、その人がどう生きたかにかかっている」(二〇三ページ) というような死に対する結論に辿りついたそうである。

評者は、仏教的かもしれないが、人は何かを学ぶために生を受け、それを学び終わると生を終えていくのではないのではないだろうか、そのようにして、様々な段階を超えていくのではないだろうかと考える。そのように考えた時、死というものが、全ての終わりなのであろうかという疑問も当然湧き上がってくる。これが良い、これが悪いではなく、あるというその事実そのものを受けとめていくこと、不安が湧き上がってきた時でもそれから逃げ出して何かしら絶対的なものを求めるのでもなく、そのものを感じてみることに、死に対しても、忌むべきものとして捉えるのではなく、自ら進んで飛び込むものでもなく、ただ自然にやってくるものとして受け入れていくという姿勢が大切なのである。今、生きている私たち自身は、今そのものに生き、人とのつながりの中で、より深い気づきがあることを信じていきたいものである。

(四) 「ほんとうのいきがい」とは

著者の諸富祥彦助教授は、心理学者でありカウンセラーでもあるが、この著書『生きていくことの意味』を通して、読者が「ほんとうのいきがい」を見つかる事が出来ればと述べている。同時に、「ほんとうのいきがい」などとはそんな簡単に見つからないものだと述べている。評者も全く同感である。しかし、文中を含め、著者が訴えつつつけている事は、求めつつけるということ、その姿勢ではないであろうか。そして、著書を通して、物事を考える過程の捉え方、すなわちプロセス思考をどのようなとき、どのようにして使うかを提示してくれているのではないか。

蛇足になってしまいかもしれないが、ここで評者が難しいと感じることは、物事への気づきとは、求めようとすればするほどなかなか辿りつけないものであり、逆にその気づきから離れてしまふ、というところである。求めようとする姿勢に固執してしまうことが、また一つのこだわりを作っていくのである。しかし、そのこだわりでさえ、私たちに何かを教えてくれる教師なのである。その点、プロセス指向とは、一般的に「ただ淡々と、無心に」と言われるより分かりやすく、具体的であるので実行に移しやすいのもおおいに評価できることである。後は、その様な状況にいる自分に気づけるかどうかである。

やかましく学び学びと言うことなく、軽快なリラククスした雰囲気の中で様々なものの見方を教えてくれるのは、著者の諸富氏の経験がものをいっている。これから、日本ではPOPを含め、トランスパーソナル心理学が、そして日本の中からもその東洋的な思想を背景として新たな動きが湧き上がってくる事であろうし、その様な動きが活発になる事を願いたい。

## 二 「死ぬ場所」を求めて

—— 広井良典著『ケアを問いなおす——〈深層の時間〉と高齢化社会』を読む——

前章では、各人がいかに生きるか、そのためのヒントを探してみた。それは、突き詰めていくと個人にとつて「死」をどのように捉え得るかということに通じてくるのではないかと思われる。現在、日本も欧米諸国に続いて高齢化が急速に進んでいる。すなわち、死を目前にする人の割合が増えてきているのである。ちなみに、「全人口にしめる八十歳以上の者の割合が二〇%を超えたのは、フランス一九六一年、イギリス一九六二年、スウェーデン六三年、ドイツ七三年、アメリカ七三年に対し、日本は大幅に遅れて後の八七年にすぎない」(一〇五ページ)というが、日本国民の平均寿命はすでに世界一になっているのである。

これらの数字を見ても、日本が急速に高齢化社会となってきたおり、同時に高齢者に対して行なわれてきたケアという問題が、今まで考えられてきたケアという範疇では捉えきれなくなってきたと考えられる。現在は、政治面からも、経済面からも、そして当然福祉・医療の面からも、より一層高齢者ケアという問題が取り上げられるようになるであろう。それらの面を総合的に、欧米との比較を交えて検討して、それを踏まえた上でのこれからのケアのあり方を、ひいては人間が生きていく上でのつながりを探っていくという一つの試みが、この広井良典助教授の『ケアを問いなおす——(深層の時間)と高齢化社会』なのである。

### (一) ケアを再考する

人が社会生活を営むにあたって、大切とされるものは、人とのつながりである。そして、そのつながりを規定

するものに、「情」がある。最近の先端科学の領域においても、人間の「感情」というものの大切さが言われており、「ややもすれば、『知』に優位をおく近代科学の文脈の中で、かえって見落とされるようになったもの」(二九ページ)が再認識されつつあるともいえるであろう。

すなわち、人間が社会生活を送るにあたっては、そして自分自身を認識するにあたって当然他者との関係を考えずにおく事は出来ないものであるが、この他者との関係を良く理解しないと「ケア」という概念が安易に間違っ  
て捉えられてしまうであろう。著者が、『私』がまずあってケアがあるのではなく、人間は「ケア」の関係の中で一人の『個』となる。『私』が『私』であることを、ケアが支えている。ここにケア論のもっとも基本的な出発点がある」(三七ページ)と言うように、他者との関係の中でこそ、人間は私と言う「個」を確立し得るのである。

そのように考えた時、「人に配慮する」とか「ケアする」とか言うことは、昔であれば人間として当然のことではあったはずではあるが、そのようなことよりも経済のこと、自分のことを優先する風潮に押しやられてしまった状況が訪れた。そして、現在はそこからまた少しずつ状況が変わってきているようである。

今、私たちは諸手をあげて「ケア」を良いものとして受け入れるだけではいけないのである。現実的な「公正の倫理」と理想論的な「ケアの倫理」(五〇ページ)がぶつかりあう中で、そこを避けることなく、組み合わせしていくこと、そのために私たち一人一人も他人事ではなく情報を収集し、状況を考え議論を重ねていかなければならないのである。そして、まさにそれこそが高齢者問題として、介護保健の問題として現在の私たちが直面しているものに他ならないのである。

## (二) システムとしてのケア

医療保険、国民年金などの破綻が叫ばれ、その問題は現実には差し迫っている。そして新たに介護保険がこの春より正式にスタートした。評者も不勉強ではあるが、著者の広井氏によると、日本政府はこの度介護保険を立ち上げる過程において、(1)「ケアマネージメント」というイギリスで開発された効率的な資源の活用、ニード中心主義を取る方法論と、(2)ドイツの介護保険制度と、(3)アメリカのMDS (Minimum Data Set)といわれるアセスメント手法の一部を混ぜ合わせてしまっており、本来全く違った社会的背景からきたそれぞれを一つにしようとするので、それが必要以上の混乱を招き、且つ問題の本質を見失っているという。これは評者自身、現場で働いている人達に聞いた所によると、到底うまく行くことがないとはっきり言われているほどのものである。

実際のところ、海外の様々な挑戦を研究する事は大切ではあるが、それらを踏まえた上で、日本にとってはどのような手法が一番適しているのか、いろいろな国の良い所を切り取って集めたパッチワークのようなものではなく、オリジナリティーを必要としているのである。

実際に介護保険に関しては、いろいろと新聞などでも取り沙汰されたが、実情は一般にはそれほど理解されていないようである。昨年から介護保険に関する国会での論争にしても、この先数年単位ではなく、数十年から百年という長い時間単位で行わなければならないという問題意識を、本当に持っているのであろうかと疑わざるを得なかった。

これからは「ケア」が一つの産業として、経済の一部を担っていくことは確かであろう。これまで、「ケア」というと家庭の中で行われたものであり、社会の中であっても実情はともあれ特別擁護老人ホームなどで行われていた。それに反して、これからは「ケアの消費」(二四四ページ)という考えがどんどん浸透してきて、否応なく

様々な形態の変化を生むであろう。

それはとりまおさず、今までは家庭が担っていた「ケア」を、一つの産業として外部に委託していくことにより、家庭という枠組み自体をも改めて考える時に来ているのかもしれない。いずれにせよ、これからの高齢者ケア、介護保険に関わる産業が一時の利益に走るのではなく、現状をどのように打破し得るのか、どのような意識を作り出していくのか見ていきたい。

### (三) ケアの科学を考える

医学は最年少の科学といわれるが、あくまでも近代科学の一部門として「(i) 不変的な法則 (law) の追求と (ii) 実験的・実証的な合理性」という方向を目指そうとした営みであった事には変わりがない。」(一六六ページ)しかし、現在、「サイエンスとしての医療」は、「高齢化の進展」と「生命科学の革新」という二重の背景のもとで、あらゆる局面において「ケア」と出会っている。今では、明らかに「サイエンスとしての医療」が「ケアとしての医療」にとつて変わらざるを得ない状況に追い込まれている。しかし、それは今までの「サイエンスとしての医療」を否定するものではない。それよりも、今までのサイエンスにケアという概念を含めた広い意味での医療が求められているということではなからうか。今までのように、病院だけではなく、家庭生活においても、地域においても、またそれらをサポートするソーシャルワークや心理なども含めて考えていくべき事なのではないだろうか。そして、高齢者の人達にとつて、「どのようにして死を迎えるか、どこで死を迎えるか」という選択がどのように本人によってなされるかという事もこれから議論されるべき大切な事であろう。

著者は、ここで「ケアの科学」の見取り図として、「治療・支援」と「自然科学的・人間科学的」という二つの軸からなり、それぞれを「医療モデル」、「予防／環境モデル」、「心理モデル」、「生活モデル」とするマトリックスを提案している。これは、生活支援サービスなどが、医療サービスに比べて一段下に見られる風潮のある中で、どのようにして対等な関係を作り出す事ができるかという問いから生まれたものである。それぞれの詳細はここでは省くが、現在、「医療」、「教育」、「福祉」などのように既にかなり制度化されている職種に比べ、未だ発展途上の「心理」が一つの制度として確立していくのか、それともある程度の緩衝材のような働きを模するような融通性あるものとなっていくのか議論されていくであろうと述べており、これは評者が考える臨床としても非常に密接に関係のある問題である。いずれにせよ「医療―福祉―心理―教育」はそれぞれに分断されることなく重なり合いと連携を持って活動される事がこれから一層望まれるであろう。

「現在の脳研究や認知科学の発展により、これまで『自然科学／人間科学』に分断された領域だった『意識の科学』が融合し新たな領域を形成しつつあるのも現在顕著である。」(一九〇ページ)などと言われるように、今、前出の四つのモデルは相互にクロスオーバーし、接近してきている。それは、『自然科学』的な側面と、『人間科学』的な側面をともに持ち、また、『固体』への関心とともに、『環境』全体への関心も併せて持つ(一九〇ページ)ような、全体を見渡すような視点の確立が必要とされているからである。

### (四) 生者と死者

ここまでの、状況、組織、システムの論点を少し離れて、ターミナルケアの本質についても一度戻って考えてみたい。著者は、「ターミナルケアの「本質」は、「魂の帰っていく場所」を探し出し、ともに確かめるという営みにこそあるように思える」と言う。ここは少し気をつけて考えなければならぬが、死というものをどう



捉えるかという問題でもある。死を全ての終わりと捉えるとき、死ぬ事は避ける事の出来ない敗北と取られるのではないか。もし死をその様に単純に捉えるならば、絶対死ぬ事は分かっているのに、延命治療を施すということなどは、敗北が決まっているのにそれを先延ばしにして、無駄な挑戦をしているだけだと取られてしまうのではないだろうか。

仏教では、輪廻という概念を用いて、人は人生を繰り返しながら少しずつ上昇していったり、下降したりしていくものなのであると説いている。死を絶対の終わりと捉えることなく、一つのライフサイクルであると捉える事により、「死にもっとも近い場所としての「老い」も、成就前の、むしろ「成熟」としてのプラスの価値をもつことができる」(二〇二ページ)とすることもできる。著者は、年齢を重ねるということが、「ポテンシャルとしては一つのもの、様々なかたちをとって現れている」(二〇三ページ)と考えてはどうかと提案している。評者としては、個人的には延命治療には反対ではあるのだが(これは決して宗教的に言うつもりはないのだが)、そのような立場から見なおすならば延命治療をただ否定するのではなく、その人がこの世で成し遂げなければ成らない事を成し遂げるため、すなわち、今現在の生において課題とされているもの(前著における人生の意味や使命のこと)があるとする立場ならば、それを遂行するための時間を与える一方法として考えられるように思われる。

本当に死に直面したとき、その当人は、「ポテンシャルとしては一つ」ということを認識し、「魂の帰っていく場所」を探しているのではなからうか。その時、当人は私たちが日常追われている時間や空間を離れていると言い、著者はそれを「深層の時間」という言葉でもって説明している。ターミナルケアとは、「そうした「深層の時間」への通路を用意し、『魂の帰っていく場所』を確かめ、いつでも死を迎えられる心の準備を可能とさせる舞台

をつくることではないかとおもえるのである。」(二〇七ページ)

私たちは、生活において亡くなった人を思い出す事がしばしばあるであろう。ましてや年齢を重ねるにつれてそれは増えてくるに違いない。人は自分一人でもなく、この世に生きている他者だけでもなく、亡くなった人達をも含めて生活しているのかもしれない。昔から何かのときには、お墓参りや、仏壇に祈ったり、お供え物をしたりと亡くなった人に対しても気を配っている。ターミナルケアとは、死ぬまでのケアではなく、その後も連続と続くものであり、一つの文化や、死生観そのものではなからうか。

### 三 おわりに

二冊の本の紹介を通して、現在の日本の混乱した状況に対する一つの視点の提示ができればと考えた。二冊の本は、主な内容もトピックも違うものであり、前著は個人の生に、そして後著は個人間のつながりにおける生に論点の中心はあったのだが、最後には両方の著書が共に何かしら似たような結末というか、締めくくりに終わっているように感じられる。今の日本人が求めている事は、戦後徹底的に破壊された死生観を再構築し、自分の価値観を確立する事であろう。そのためには、福祉、教育を始め、医療、心理、経済、政治など全ての分野が関わってくるべきであり、協力関係を作っていくべきであると思われる。

先は見えないと思われるかもしれないが、晴れない霧はないのである。避けることなく、「今」を大切に、様々な事に「気づく」ことができるような姿勢を作って、前向きに問題に取り組んでいくしかないであろう。既に様々な試みがあちこちで行われている。政治も経済も動いている。たくさんの方が合わさって、「今」を大切にしつつも、長い目でより良い社会にしていこうという積み重ねをするしかないと思っている。